

# 崩壊する名づけ —「きらきらネーム」に顕在化する階層の再生産—

HS23-00186 渡邊 祥吾

## 1. はじめに

名前は、人々を認知・判断する際に用いるひとつのツールとして、誰もが所有しているアイデンティティである。

しかし、2004年に名前に使用できる漢字が488文字追加され、常用漢字と人名漢字合わせて2997字体が使用できるようになった(2014年12月12日現在)(牧野 2012)。

加えて、現在の法律では名前の読み方に制約がない(山口 2013)。つまり使用できる漢字が増加し、読み方にも制約がないことで、さまざまな名前を作り出すことが可能となっている。その相乗効果から、名前が多様化していると推察される。さらにいえば、名前の多様化が進行したことで、「きらきらネーム」と呼ばれる用語が誕生し、賛否両論の議論を呼んでいる現状がある。

「きらきらネーム」(以後著者が学術的用語として造った異彩ネームと明記する)とは、名付け親が個性的な名前を自画自賛する際に用いる。また、第三者が皮肉を込める時などに使用するものである(牧野 2012)。皮肉を込める理由には、その名前が一瞥しても読みにくいといった意見がある。ならびに、海外の言葉やキャラクターの名前を当て字にするといった理由から、従来ではなじみがない名前と判断していると推察される。

この「異彩ネーム」に関して、様々な機関が警鐘を鳴らしている。例えば、名前と触れ合う機会の多い医療機関や教育機関、就職活動を担当する人事関係者や政治家が「異彩ネーム」について述べている。名前を決めるのは名付け親の権利であり、ある程度の自由は必要だろう。しかし、多くの機関において問題提起がなされているということは、少なからず他者や名前を付けられた本人に不便なことが起こっているのではないだろうか。

そこで、本稿ではどういった特徴を持つ人が、「異彩ネーム」を許容する傾向にある人なのか探っていく。名前問題はメディアなどを賑わせているものの、近年顕在化してきたものであり、未だに知られていない部分が多い。また、研究が多

くなくされていない「異彩ネーム」を取り扱うだけでも、今後の研究における土台になると考える。加えて、現代の名づけの価値観が何らかの要因によって左右されているのであれば、その価値観を生み出す社会的な背景を明らかできる。

## 2. 先行研究

近年「異彩ネーム」が増えている要因として、先立った主張はいくつかあるが、著者が注目したのは日本社会における階層の二極化が「異彩ネーム」増やしているという主張である。つまり、「異彩ネーム」を許容する層としない層に分化している。詳しく述べると、前者は階層間では低く位置づけられる新興層であり、後者は高く位置づけられる保守層だという仮説である(佐藤 2007)。

この主張は、かつて中流層であった層が、少子高齢化・不況などの社会構造の変化によって、階層が低く位置づけられる層に流入しているという三浦(2005)の提唱がもととなっている。

しかし、佐藤(2007)が提示した上述の主張は階層の二極化が起こっているのではないかと示唆しただけであり、実際に検証を行っていない。そこで、著者は階層差と名づけの価値観の因果関係を検証しようと考えた。この検証を行うに当たって、本稿では名前を文化として位置づけ、ブルデューの著書『ディスタンクシオン』で提起されている「文化資本論」と人々の名前の価値観を関連付けることができると考えた。

文化資本論とは、簡単に説明すると「身体化された文化」・「客体化された文化」・「制度化された文化」の3つの文化が、資本として蓄積し継承されていくというものである(宮原 1999)。

また、宮原(1999)は文化間には障壁があり、その文化の障壁が社会的層化、あるいは不平等を再生産する要因となっているのではないかと指摘している。その文化の障壁が名づけにも関連するという前提を導き出し検証を進めていった。

## 3. 仮説と使用データ

本稿では、「階層が高い人ほど、異彩ネームを

受容しない傾向にある」と仮説を立て、対立仮説として「異彩ネームを受容しない要因として、階層差は関係がない」とした。

上述の仮説を検証するために、著者と共同調査者が実施した「社会人の生活意識に対するアンケート」の回答を調査データとして扱う。対象者は年齢の下限を 20 歳、上限を 75 歳以上とした男女である。有効回答数は 236 人であり、層化は特に行わずそのままサンプルとして使用した。

#### 4. 分析枠組みと分析方法

分析手法として、線形回帰分析と二項ロジスティック回帰分析を用いた。また、線形回帰分析では、著者が設定した 19 個の名前群（「望愛」「熱寿」など）の中から回答者が異彩であると選択した合計数を「ナンバーオブネーム」として従属変数とし、「多い」「ふつう」「少ない」という 3 カテゴリーに分類した。

二項ロジスティック回帰分析では、19 個の名前群の中で、異彩であるか判断の分かれた名前に着目し、「あいまいな名前」として従属変数にした。

なお、独立変数を学歴とし、統制変数として家庭の生活水準、年齢、性別を加えて分析する。

#### 5. 分析結果

異彩であると考える名前の選択数の違いは、学歴が強い影響を与えていると判明した。また、「あいまいな名前」を異彩かどうか判断する差は、家庭水準の差が影響を与えている。加えて、どちらの分析でも女性のほうが男性と比べて、階層差による影響が強いことも分析から明らかになった。

つまり、「階層が高い人ほど、異彩ネームを受容しない傾向にある」という仮説を立証でき、なおかつ男女で効果の強さの差をみることができた。

#### 6. 文化的再生産と名前

分析の結果により、階層と名づけの価値観の間には有意な関係性があるということがわかった。つまり、階層差が異彩ネームに対する価値基準になんらかの影響を与えていると推察される。これは、佐藤（2007）が示唆した階層の二極化が名づけの価値観に影響を与えているといえるだろう。

加えて、男性に比べて女性のほうが、階層差の影響が強くみられた。これは、仮説を発展させる

知見であった。性差が生まれた原因としては片岡（1992）の主張を結びつけることができるだろう。

片岡（1992）によれば、妻は夫の地位に応じて文化的活動を行うようである。それに対して男性に関しては、階層に即した文化的活動を行うかどうかは女性ほど重要ではない。名前を牧野（2012）の主張通りに高級文化と位置付けるのであれば、夫の社会的地位と結びつきが強い女性のほうが、階層の影響が色濃く出たのではないだろうか。

いい名前かどうか判断するのは、人それぞれの主観に基づくものであり、「～の特徴を持つ名前がきらきらネームである」というには議論の余地があるだろう。

しかし、あまりにも個性的な名前が社会に蔓延すれば、名前の機能が崩壊し将来的に日本文化にも何らかの影響をもたらすのではないだろうか。また、名前によって階層が顕在化してしまうと、上昇志向を持っている人が「異彩ネーム」と社会で判断される可能性もないとはいえない。つまり、名前としての機能を果たしていなければ、さまざまな場面で影響がある。換言すれば、階層間における格差の再生産が起こりかねないとする。

名前は決定すれば変えることは難しい。また現代の日本社会において、階層がみえやすい社会へと移行しているからこそ、誰もが持つ、アイデンティティのひとつでもある名前について本稿を通して再考してもらえれば幸いである。

#### 【参考文献】（一部抜粋）

- 片岡栄美, 1992, 「社会階層と文化的再生産」『理論と方法』7: pp.33-55.  
 佐藤稔, 2007, 『読みにくい名前はなぜ増えたか』吉川弘文館。  
 ブルデュー. P 著, 石井洋二郎訳, 1989, 『ディスタクシオン I - 社会的判断力批判』藤原書店。  
 牧野恭仁雄, 2012, 『子供の名前が危ない』KKベストセラーズ。  
 三浦展, 2006, 『下流社会——新たな階層集団の出現——』光文社。  
 宮島喬, 1999, 『文化と不平等』有斐閣社。  
 山口諤司, 2013, 『名前の暗号』新潮社。